

## 白雄散策

2003/04/23 10:55

ひと恋し火とぼしころを桜ちる (白雄)  
人恋し灯ともし頃を桜ちる (頼原退蔵)  
人恋し灯ともしころをさくらちる (白雄の秀句 矢島渚男)  
桜の季節になると想いだす句。

白雄と蕪村の生没を調べてみると、加舎白雄(元文三年(1738)-寛政三年(1791))と謝蕪村(享保元年(1716)-天明三年(1783))であり、白雄は蕪村が二十二歳の時、生まれたことがわかる。さまざまな句形があるが、私は一行目の句を採用したい。

”ひと恋し”の『ひと』とは誰なのだろう。恋しい人、飲み友達、俳諧仲間などを想定したきた。最近、『ひと』とは西行法師、南朝時代の武士(ものゝふ)のことであると知った。飲みたい気分の時には飲み友達、一旬ひねりたくなったら句仲間、でもいいような気がする。詩文においては、読者は作者である、が持論であるゆえん。“火”と“灯”については、平成の今では“灯”がぴったりするが、白雄時代では、やはり“火”であろう。しばらく、白雄を散策してみようと思う。

2003/05/02 19:37

しぐるゝや鹿にもいふ油つぎ (白雄)  
春日神社での作品。<木々寒し鹿にもいふ油つぎ(書簡)>が初案。  
炭窯や鹿の見て居る夕煙 (巴人)  
夜半亭さんが“巴人その四”で紹介した句。写生の句とみるかどうか議論のある句。  
奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞(時ぞ秋は悲しき(猿丸大夫、古今集))  
雄鹿は雌鹿を恋慕って鳴く。その声に歌人は“もののあはれ”を感じたか？

猿丸大夫は“鹿の鳴き声”に“哀切”を感じ、秋は悲しき、と勝手に悲しがっている。それは人間様のこと、鹿のあずかり知らぬことである。白雄の句では、鹿もまた自然の造化、だからこそ油つぎは鹿に言葉をかけた。油つぎの周囲にいる“神に仕える人”には、おそろく気軽に話しかけることなどできないのであろう。自然の非情の掟に翻弄されて生きる“鹿”と、人間界の底辺で細々と生きる“油つぎ”が、しづれる夜に交差した、いや、交差させた白雄の人生観が、句の背後にある。しかし、それを感じさせないところに、この句の良さがあると見るのは、深読みか？

2003/05/09 17:26

夜の音木のは身を刺すおもひあり (白雄)

不思議な句である。歳時記によれば“木のは”とは、冬になって散る木の葉、もしくは、梢に散り残った乏しい木の葉を言う。切字はないが“夜の音”と“木のは身を刺すおもひあり”が切れている。そこまでは判るのだが、今もって私には句の意味がわからない。“夜の音”を風に吹かれて散る枯葉の音と捉えたのは、矢島渚男(白雄の秀句)である。私の心象風景には風は吹いてはいない。だから木の葉の散る音は聞こえない。確かに句では“木の葉”は散っている。だが、その音は聴覚では捉えられない音である。だからこそ“夜の音”なのである。俳画の名手、蕪村でもこの句は俳画にできないのではあるまいか。わからない句だが、この句に魅かれる。いずれ、わかる時がくるだろう。

2003/05/13 19:18

啼けばなくふたつの山のかんこ鳥 (白雄)

郭公の呼び合うような啼き声を聞いて、軽い気持ちで詠った、遊びごろの句に思える。相聞の句、交歓の句とも読み取れる。芭蕉は閑古鳥のさびしさを詠ったが、白雄は初夏の交歓を詠ってみたのかとも知れない。“かんこ鳥”のかわりに“ホトトギズ”ではどうか。ホトトギズでは、鳴き声があまりにも鋭すぎ、啼けばなぐに相応しくない。さすが白雄、遊びとは言いながら俳諧味は喪わない。作り過ぎの句、嫌味の句と見る向きもあるかもしれない。私もはじめはそう思っていた。“ふたつの山”で思い出すのは、蕪村の“さみだれや大河を前に家二軒”である。そのほかに“鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな”、“牡丹散つてうちかさなぬ二三片”がある。芭蕉にはみられなかった特長とは言えまいか。(古池の句では蛙一匹であり、“枯枝”の句では鳥一羽が相応しい。) 今回は、白雄の句を肴に戯れてみた。

参考までに：

閑古鳥いまやくれぬとあや啼す (白雄)

憂き我を寂しげらせよ閑古鳥 (芭蕉)

2003/05/22 15:48

鳳凰 (いかのぼり)空見てもものはおもはざる (白雄)

俳句はつくづ判じものとの思いがする。“空見てもものはおもはざる”のは、“人”なのか“鳳”なのか。空に悠々と浮かぶ鳳には、人を幻想の世界に誘うなにかがある。心をときめかせるなにかがある。しかしそれが何であるのか、本人にもわからない。なにかを思っているのだが、それを言葉にできず、実は何も思っていないのではないか。この不思議な感覚は私の少年時代のものである。鳳の糸をどこまでも繰り出していけば、夕日に届くのではないか、の思いに捉われる。この感覚は寒風の野原で鳳揚げをしたことのない人にとっては、無縁のものであろう。鳳は風にまかせて空に舞う。この鳳の絵を武将としよう。武将は揺らめきながら空を睨んでいる。ただひたすら睨んでいる。なにも考えてはいない。自然の中に身を任せているだけである。空を見ているのは、人なのか鳳なのか? いまもって、どちらに軍配を挙げようか迷っている。詩論風に解説すれば、“鳳凰空見てももの(を)おもはざる”であれば、『観念風景』である。作為が見え隠れするからである。“鳳凰空見てももの(を)おもはざる”であれば、『感情風景』である。和歌で表現される風景に近い。心の動きが露呈されている。“鳳凰空見てももの(は)おもはざる”は、『心象風景』である。心象風景の句は解釈を拒否する。いかんとも説明し難い。観念風景、感情風景、心象風景それぞれ、紙一重の差である。白と黒の差は歴然としているが、白にきわめて近い黒、黒にきわめて近い白があるようなものである。

参考までに、

夕ぞらや 鳳見に出でし酒の酔 (白雄)

酒の酔いに浮かれて、鳳を見に出かけるとは、風流なものである。夕焼けに浮かぶ鳳には、ところをときめかせる何かがある。

鳳 (いかのぼり)きのふの空のありどころ (蕪村)

さすが蕪村と言うしかない。

2003/06/01 16:32

陽炎 (かげろふ)の眼 (まなこ)にしみるばかりなり (白雄)

このような句に接すると俳諧の出自が、閉ざされた世界(作者即ち読者の世界、仲間うち、同門の人々)にあったことが思われる。これを称して桑原武夫氏は俳句を『第二芸術』と言ったが、これも俳諧の側面であろう。例えば贈答の句は、贈る者と贈られた者の間で判り合えば良いのである。兄危篤の報を受け、江戸にいた白雄は信州上田に急ぐ。臨終には間に合わず、兄は既に葬られていた。その墓前で句。詞書に「憶(おもふ)に昔佛(おもかけ)薄うして愛ふかゝりしを思ふに、今日転々(うたた)反側して天に叫べどもこたへなきをや。墮涙(おぼろ)どむべくもなし。階行せし猶子(甥)どもにいさめられて……」とある。解釈できない句であるが、強いて散文化すれば、陽炎は兄の佛であり、その佛が眼にしみるのである。そう言えば“煙が眼に沁みる”といふ歌の文句もあった。この表現は詩文のように見えるが、散文である。しかし“陽炎の眼

にしみる”は詩文である。陽炎(や)と切字をつかわず、切らなかつたのは、「てにをは」にうるさい白雄ならでの技法であろう。限りなく川柳に近い句ではあるが、好きな句である。“陽炎の眼に(にじむ)ばかりなりとすれば『観念風景』である。有り得ない風景である。“陽炎の眼に(浮かぶ)ばかりなりとすればこれも『観念風景』である。“浮かぶ”のが“陽炎”なのか“兄の佛”なのか判然としない。“陽炎の眼に(しみる)ばかりなり”では兄の佛が“陽炎のなかに揺らめくのである。

参考までに、

陽炎やしづかなる日の敷がはら (白雄)

詞書に「天真禪刹」とある。禪刹が意味不明であるが、「天真禪刹」は“自然のあるがままに、禪が導くままだ”という意味であろう。実景は寺の境内であろうか？

丈六に陽炎高し石の上 (芭蕉)

古語の知識がなければ手も足も出ない句である。丈六は“一丈六尺(約五メートル)、仏像の標準的な高さ”であり石は“石蓮台、蓮華形に造られた仏像の台座”である。仏の像は既に無く、陽炎が仏を偲ばせるように立ち昇っている、そのような句であろうか。

2003/06/26 16:48

園くらき夜を静なる牡丹かな (白雄)

頼原退蔵氏は蕪村の牡丹のいくつかの句を挙げて“白日の花壇に咲き誇る華麗さを詠じている”と評し白雄のこの句を“沈重の中に妖艶な気配を帯びる”と高く評価している。“園くらき”の園は、牡丹園のような観賞用の園ではないであろう。寺院のはずれ、樹木が茂っているあたりであろう。“園くらき”と“夜”を意重なりとみるべきではなく、牡丹が咲いているところはそもそも暗かったのである。“夜”と“静かなる”も一見、意重なりに見えるが、“夜”と“静かなる牡丹”の配合とみるべきであろう。正直なところ、いかなる評釈もできないほど、すごい句に思える。

参考までに、

散りて後おもかげにたつぼたん哉 (蕪村)

もはや脱帽するのみ。現代俳人の中には、現代俳句は芭蕉 蕪村を超えたと主張する人がいるが、彼等の俳句観と私の俳句観の違いはあまりに大きい。

夜の色に沈みゆく大牡丹 (高野素十)

どういふ俳人かは知らないが、歳時記に載っていた句である。記憶に遺る句である。

久しに夫(つま)と見る花白牡丹 (作者不詳、上野東照宮にて)

牡丹園を訪れた老夫婦であろう。老夫婦の囁目句、達筆な十七文字が掲示板に貼られていた。忘れ難い句である。

2003/07/07 15:27

子規(ほととぎす)なくや夜明けの海がなる (作鳥、白雄以前の俳号)

三十三歳の句。鳥酔一周忌、鳴立庵にて詠んだ句である。鳴立庵は大淀三千風によって元禄八年(1696年)現在の神奈川県大磯町に建立された。白井鳥酔が後を継ぎ、以降鳥酔系の俳人が庵主となる。当時は鳥明が鳥酔を継いで庵主であった。(尚、白雄が庵主になったという記録は無い)如毛宛て書簡に“鳥酔小祥忌(一周忌)に付無拠(よんどころなく)大磯へ罷越”と記しているように、鳥明に疎んじられていた白雄は、鳥明が差配する小祥忌には出たくなかつたのであろう。以上の背景から、句の子規は実は白雄自身ではなかつたか、とも思えてくる。“夜明けの海がなる”には鳥酔を教えを継いで蕉風を復活させるのは不肖白雄である、の気概がこめられているのではないだろうか。在野人さん指摘のように、この句はアウトサイダー宣言の句とも読み取れる。若葉萌える時節(初夏)時鳥の声は“帛(きぬ)を裂くが如し”とか“鳴いて血を吐くと言われるように、穏やかな春日の鶯の鳴き声に較べて鋭く野性味がある。“時鳥なくや”に白雄の鋭い心の叫びを聴く。夜半亭さん、在野人さん、最近、時鳥の鳴き声を聞いたことがありますか？

まわりから自然が失われてしまった今、鶯も時鳥も句(知識)の中だけの鳥になってしまったような淋しさを感じます。

参考までに、

ほととぎす鳴くや五尺の菖草(あやめぐさ) (芭蕉)

“ほととぎす鳴くやさ月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな(読人しらず、古今集)からの換骨奪胎。”あやめも知らぬ“は”綾目も知らぬ“で”織目もわからない“となりぞっこん惚れ込んで支離滅裂“の意であろう。菖蒲と綾目とが掛詞になっている。五月の菖蒲は和歌では許される表現であるが、俳諧では”意重なり“となり避けられる。俳諧ではこう詠うと芭蕉が示した手本(教育用)の句であろう。

時鳥啼くや湖水のさゝ濁り (内藤丈草)

湖水は琵琶湖の意。さゝ濁りで梅雨時の季感を演出している。

時鳥啼くや有磯(ありそ)の浪がしら (加藤暁台)

有磯は荒い磯の意。私にとって意味不明

2003/07/16 14:13

魂むかひこゝろ碓氷を越(こゆ)る夜ぞ (白雄)

五十四歳の句。考証によって死去二ヶ月前の句であることがわかっている。晴の句に対して曇の句と言うべきなのであろうか。“魂むかひ”と“碓氷を越る”の配合を素直に受け入れる読者は白雄の生涯に詳しい人であろう。白雄の生涯を知らなければ解読不能の句ではあるまいか。白雄は江戸日本橋に住んでいた。そして最も親しい肉親であった兄の墓は信州上田にある。兄の墓参りには碓井峠を越えなければならない。父と生母の墓は江戸にあるから“碓氷を越る”必要はなく“碓氷を越る”によって兄の墓とわかる。白雄生誕の地は江戸であるが、心の中では上田を故郷(ふるさと)と思い定めていた節がある。としありてこのかみの家にあそぶ」を詞書として「ふるさとや梅に柳にはなしあじの句がそれを証明している。“このかみ”とは兄(加舎吉重、上田に居を構えていた)のことである。兄を偲び、兄の墓に行きたい。思いは募るが体がいうことをきかぬ。白雄は再び兄の墓を訪れることが出来ないことを予感していたのではなかったか。白雄ほど魂祭の句を多く詠った俳人はいないような気がする。

参考までに、

霊まつやはしらすだめぬ宵の宿 (白雄)

五十四歳の句。兄の七回忌に詠む。季語は“宵”で春。“魂むかひ”の句は七回忌を済ませ江戸に戻ってからの作。

憂き我に誰々まつる生身魂(いきみたま) (白雄)

生身魂は“生きて死者を弔う人のこころ”の意か？

しばしもと亡き魂やどせ艸の露 (白雄)

魂まつり貧家(ひんけ)の情ぞまことなる (白雄)

みな子なり霊まつ門に草蓆 (白雄)

我庵へ亡き魂かへれ夜半の秋 (白雄)

数ならぬ身となおもひそ玉祭り (芭蕉)

詞書には「尼寿貞が身まかりけると聞きて」とある。寿貞にたいしての追善句。“数ならぬ身”は“取るに足らない生涯”の意味。

徹書記(てつしよき)のゆかりの宿や魂祭 (蕪村)

徹書記は清巖正徹、室町時代の禅僧、歌人。藤原定家の有心歌風を継ぐ。

2003/07/19 16:53

なにとなく曇て星のわかれ哉 (白雄)

難しい言葉は無い。解釈不要の句である。いや、解釈拒否の句であろう。解釈すればするほど白雄の

心象風景』から遠ざかりそうな気がする。“なにとなく曇て”は自然の運行、神ですら予見不可能な宇宙の瞬き。“星のわかれ”は人間界の思惑、牽牛と織女にとってあずかり知らぬこと、明日(来年)があるさ、と達観しているのかもしれない。だが私はここに白雄の日本的諦観を見る。いつの時代になっても、人間いや生物は自然に翻弄される。“曇て”と“星のわかれ”の配合は、白雄の人生観であろう。この句に『愛情一致』を極致みる。この句を前にすると、芭蕉も蕪村もかすんで見える。蕪村も白雄には一目おいていたらしい。謝寅(蕪村)が佳業に宛てた手紙のなかに、次の一文がある。『夜前之句、“うら寂しつりの糸吹(秋の風)、白雄子へ御見せ可被下(くださるべく候、畏々)』、考証に拠って白雄子が加舎白雄であることが確定している。長い間、この句が誰の作か判らなかつた。偶然『俳文俳句集』(日本名著全集刊行會)を見ていたら白雄句集の中にこの句を見つけた。やはり、白雄であつたか、とほつとした。

2003/07/27 16:29

のざらしを見て通りけり秋の雨 (白雄)

詞書は『自他共白骨』。『実風景』はきわめて明快。秋雨の降る中、行き倒れを見て通りすぎた。現(うつ)が見せた無言の白骨に冷たい雨が降り注ぐ。幻(まぼろし)に見る己の白骨、ともに諸行無常の土に還る。有りし世の現実、実は一瞬の幻ではなかつたか。“秋の雨”に収穫の秋を暗示し、“のざらし”で飢饉で食料が無いことを暗示している。白雄が活躍した天明期、飢饉が多かつた。天明の大飢饉は有名で、天候不順、大洪水、噴火による大凶作。特に奥羽地方は被害大、草根、木皮を食べ尽くし、津軽藩では二十万の餓死者。“見て通りけり”はただ見て通り過ぎたのであろうか。“見て”に白雄の哀しみの眼差しが見える。溢れる涙で合掌していたのではないだろうか。そして「人間の弱さ」を噛みしめていたのではないだろうか。この句に関連して、どうしても芭蕉のあの句を思い出さずにはいられない。蕉風の旅『野ざらし紀行』の句である。

猿を聞く人捨子に秋の風いかに (芭蕉)

句の巧拙には議論があろう。だが私は芭蕉の心を探りたい。芭蕉は“いかにぞや、汝、父に悪(にく)まれたるか、母に疎まれたるか。父は汝を悪むにあらじ、母は汝を疎むにあらじ。ただこれ天にして、汝が性のつたなきを泣け”と記す。捨子は自分とはかかわりが無い、いくばくかの食料を与えて見捨てざるを得なかつた。だが言いようの無い心の痛みが蟻る。自然環境の苛酷さに脆い人間、社会制度の矛盾に対して無力な自分、人間の弱さを自覚していた芭蕉の慟哭が聞えてきそうである。野ざらしを句に定着させた白雄、そして捨子を句に定着させた芭蕉、二人は心眼で“心の闇”を捉えたのであつた。

私はこの句を白雄の代表作としたい。